

〔提 言〕

## 予防的育児支援と家族の価値観—Strength Based Approach の重要性—

名古屋大学医学部保健学科（発達看護学）

浅野みどり

アメリカのサブプライムローンの破綻に端を発した世界的な経済不況に関するニュースが連日報道されている。日本企業への影響も予想以上に大きく、自動車関連工場などを中心に期間従業員や派遣社員など非正規雇用者の契約解除をはじめ、正社員のリストラさえも起きている。経済破綻を苦に、子どもを道連れにした痛ましい心中事件が発生し、貧困の生活苦から刑務所に収容されることを意図した高齢者の犯罪が増えているという。

“親の失業”は、子どもの虐待や非行の重大なリスク因子としてよく知られている。2008年秋、保護者が国民健康保険料を滞納し、保険証のない「無保険」となった子どもがわが国で3万2千人を超えることが明らかとなった。子どもたちの健康が危ぶまれるが、「子どもに罪はない」と無保険の子どもも必要な治療を受けられるよう保険証を交付する改正国民健康保険法が12月に衆議院本会議で可決、成立し、2009年4月から施行される。保護者が保険料を長期間滞納しても、中学生以下の子どもについては保険証返還の対象外とし、有効期間6か月の「短期保険証」が発行され、保険証更新時に市町村は保護者と納付相談を行う仕組みということである。一部には「親の保険料滞納を助長する」との意見もあるという。

直接的に貧困から人々を救済する、経済支援を行うことが、看護学本来の役割ではないことは承知しているが、老若男女を問わず、貧困から波及してくる様々な健康問題を予防する、あるいは改善するために福祉職など他職種と積極的に連携・協働することは、看護職の重要な役割だと考える。2008年は、浅井春夫、松本伊智朗、湯澤直美 編『子どもの貧困—子ども時代のしあわせ平等のために』（明石書店）、阿部彩 著『子どもの貧困—日本の不公平を

考える』（岩波書店）など、“子どもの貧困”に関する書籍が複数発行された。日本における格差社会がいよいよ顕在化してきていることを示しているのだと思う。耳塚寛明氏は前者の書評の中で「だれにでも機会が開かれた競争という業績主義社会を支える『公正』の前提が子どもの貧困の存在によって突き崩されてしまうからだ。子どもの貧困は、富みの格差が子世代へと再生産され、人生のスタートラインにおいて機会がけって平等に開かれているわけではないことを端的に示すからである」と指摘している。

この“子どもの人生のスタートライン”をすべての子どもが健康的に出発できることを目指して、アメリカ・オレゴン州では予防的な家族支援として、集中的・継続的家庭訪問サービス“Oregon Healthy Start Program”が実施されている。1993年に試験的に始まり、2001年には州全体に拡大し、子どもの虐待を半減させるなど大きな成果を挙げている。このプログラムは、児童虐待予防アメリカ（PCA America）のプログラムのひとつHealthy Family America（HFA）の認可を受けて支援スタッフの研修や実践が行われている。肯定的なペアレンティングと子どもの健康と発育を促進することによって児童虐待や発育に悪影響を及ぼす状況を排除しようとするもので、人間関係・強み・家族中心・家族の文化を基礎とする哲学的アプローチを重視する。

Calgaryモデル、Friedmanモデルに限らず、家族支援の効果を考えるとき、家族の価値観やビリーフ、そして強みを尊重することが重視されることは疑う余地がない。けれども、家族の価値観を常日頃から意識して暮らす家族はあまりないだろう。「自らの家族の価値について考え、語る（言語化する）機会があること」こそが重要であると日々実感している。